

ルクセンブルク大王国 徹底解説

地理

歴史

政治

国家の象徴

経済

人口

言語

教育

文化

目次

ルクセンブルク大公国

徹底解説

2	4	6	10	12	14	18	20	24	26
クイックガイド	地理	歴史	政治	国家の象徴	経済	人口	言語	教育	文化

クイックガイド

正式名称

ルクセンブルク大公国

首都

ルクセンブルク

ナショナルデー

6月23日

通貨

ユーロ

地理

位置

北緯49度37分東経6度8分

面積

2,586km²。このうち、85.4%が農地もしくは森林(2013)

隣接国

ベルギー、ドイツ、フランス

気候

ルクセンブルクの気候は温暖で、1981年から2010年における年間の平均気温はマイナス2.6°C(平均最低気温)から21.6°C(平均最高気温)。

領土

行政区分

- ・ 12のカントン(カペレン、クレルヴォー、ディーキルシュ、エシュテルナツハ、エシュ=シュル=アルゼット、グレーヴェンマッハー、ルクセンブルク、メルシュ、ルダンジュ=シュル=アテール、レーミツヒ、ヴィアンデン、ヴィルツ)
- ・ 105の自治体(コミューヌ)
- ・ 4つの選挙区(南部、中部、北部、東部)

司法管轄区

- ・ 3つの治安判事裁判所(ルクセンブルク、エシュ=シュル=アルゼット、ディーキルシュ)からなる2つの司法管轄区(ルクセンブルク、ディーキルシュ)

人口

総人口

54万9,700人。全人口の45.3%を占める24万8,900人は外国人居住者(2014年1月現在)

最も人口密度の高い都市

ルクセンブルク(10万7,200人)
エシュ=シュル=アルゼット(3万2,600人)
ディフェルダンジュ(2万3,600人)
(2014年1月現在)

言語

国語

ルクセンブルク語

公用語

フランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語

政治

政治制度

立憲君主制のもとでの議会制民主主義

国家元首

アンリ大公

(2000年10月7日即位)



関連機関

Institut national de la statistique et des études économiques (Statec)

(ルクセンブルク国立統計局)

Centre administratif Pierre Werner

13, rue Érasme

L-1468 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-84219

info@statistiques.public.lu

www.statistiques.lu

Service information et presse du gouvernement

(ルクセンブルク政府広報局)

33, boulevard F.D. Roosevelt

L-2450 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-82181

info@sip.etat.lu

www.gouvernement.lu

www.luxembourg.lu

Office national du tourisme

(ルクセンブルク政府観光局)

B.P. 1001

L-1010 Luxembourg

Tel.: (+352) 42 82 82 10

info@visitluxembourg.com

www.visitluxembourg.com

参考ウェブサイト

www.luxembourg.lu

www.promoteluxembourg.com

www.etat.lu

地理

西ヨーロッパの中心に位置するルクセンブルク大公国は、ベルギー、ドイツ、フランスに囲まれています。地勢により、北部のウスリング地方、南部のグートランド地方の2つに大きく分かれています。グートランド地方は、東にモーゼル渓谷、南に鉱物資源の豊富な盆地を擁しています。

ルクセンブルクの面積は2,586km²で、このうち、ウスリング地方は828km²、グートランド地方は1,758km²を占めています。

首都

首都であるルクセンブルク市は標高300mの地点にあります。岩山に築かれた近代的な街並みと、崖下で昔ながらのたたずまいを残すグルント、クラウゼン、パッフェンタールとのコントラストが見事です。

市の北東にある新市街のキルシュベルグには、1960年代より、数多くの欧州機関が軒を連ねています。

地方

ルクセンブルクの最大の魅力の1つが変化に富んだ景観です。国内は地勢により、ウスリング地方とグートランド地方の2つに大きく分けられます。

・ **ウスリング地方**: 北部のウスリング地方はアルデンヌ山脈の一部を成し、ドイツのアイフェル高原に接している緑豊かな地域です。国土の3分の1(32%)を占めており、多くの観光客を惹きつける観光地でもあります。ルクセンブルクでも最も標高の高い地点はこの地域にあり、その標高は560mです(ヴァイルヴェルダンジュ)。高地の村々と川、湖が美しい景観を形作っています。急峻な斜面には、オークの森や松林が広がっています。ルクセンブルクの中では気候が比較的厳しい地域であり、主な町としてはヴィルツ、クレルヴォー、ヴィアンデンがあります。

- ウスリング地方の北部にある高台、トロワヴィエルジュは森林が少なく、大半が耕地です。ルクセンブルクでも最も気温が低く、降水量の多い場所です。
- アルデンヌ高地は、盆地状のヴィルツの南にあり、いくつもの川が横切るように流れ、いかにもウスリング地方らしい光景が広がっています。多様な地形や色、高台と森林が優美な対比を見せています。

ウスリング地方とグートランド地方の境界地域は、多様性に富んだ肥沃な土壌に恵まれ、ルクセンブルクの主要農業地域のひとつとなっています。

・ **グートランド地方**: 国土の68%を占め、「良い土地」を意味するグートランド地方は国の中心部から南に広がる地域で、首都のルクセンブルク市も同地方にあります。田園地帯と森林地帯が中心で、主に次のような特徴があります。

- グートランド地方の大きな特徴といえる砂岩の台地では、ルクセンブルクでも最も美しい森が見られます。
- グートランドの地勢で最も象徴的で広い範囲を占めているのは泥炭質の盆地です。ドガー山麓や砂岩の台地にまで広がり、幅の広い谷を形作っています。こうした土地の3分の2では、農業が営まれています。
- 壮大で多彩な表情を見せるモーゼル川の渓谷は、ルクセンブルクでも最も印象的な場所です。ルクセンブルク最大の観光名所の1つで、ワインの名産地でもあります。
- ルクセンブルクの小スイスとも呼ばれるミュラータール地方はモーゼル渓谷の北にあり、ドイツと国境を接しています。主な町はエシュテルナッハで、ルクセンブルクでも最も長い歴史を持つ町の1つです。



モーゼル地方: モーゼル川とブドウ畑
© ONT

- 「赤い土」を意味するテールルージュは泥灰質の低地の南に位置しています。赤い土壌からは鉄鉱石が採掘され、テールルージュは工業地帯として栄えてきました。この地域にルクセンブルグ語で「ミネット」の名前が付けられているのはそのためです(フランスのロレーヌ地方で多く産出される「ミネット鉱」に由来)。主な町には、ルクセンブルグ第2の町であるエシュ＝シュル＝アルゼットやディフェルダンジュ、デュドラージュがあります。
- 「7つの城の谷」では、メルシュ城、シュンフェルス城、ホルンフェルス城、アンセンブルグの2つの城、セツフォンテーヌ城、クーリッシュ城という7つの城が24kmの距離内に並んでいます。古い村々や牧草地の間にたたずむこれらの城を眺めての散策は最高です。

気候

ルクセンブルクの気候は特定の気候区分にはあてはまらず、大西洋側の海洋性気候(季節による変動が小さく、冬は温暖で降水量が多い)と、東ヨーロッパ平原の大陸性気候(季節による変動が大きく、冬は厳しく、夏は雨が多い)の両方の影響を受けています。

海洋性気候の影響により、年間を通じて雨が降り、大陸性気候の影響で、冬は身を切るほど寒くなり、乾燥します。5月から10月半ばの気候は穏やかです。6月、7月、8月が最も暑い時期で、太陽の光が最も多く降り注ぐのは7月と8月です。9月および10月には、ルクセンブルクならではの小春日和が楽しめることも多くあります。

1981年から2010年の年間気温は平均9.4°Cで、最低気温は平均でマイナス2.6°C、最高気温は平均21.6°Cでした。

標高差により、国の南北で約2°C程度のわずかな差があります。



オートシュール湖
© Christof Weber/SIP

河川系統

ルクセンブルクには、モーゼル川、シュール川、ウール川、アルゼット川の4大河川があります。そのほか、西部にはメス川、マメール川、アイシュ川、アテール川、ヴァーク川があります。北部にはヴィルツ川、クレルブ川、ブリース川があります。東部には白エルンツ川、黒エルンツ川、スイール川、ガンテール川があります。ペトリュス川はルクセンブルク市を通る小さい川で、アルゼット川に流れ込んでいます。

国の南西部からムーズ川に流れ込むシエール川を除くと、ルクセンブルクの川は、モーゼル川を經由してライン川に合流します。

行政区分

ルクセンブルクには12のカントンと105の自治体(コミューヌ)、4選挙区があります。

関連機関

Office national du tourisme

(ルクセンブルク政府観光局)

B.P. 1001

L-1010 Luxembourg

Tel.: (+352) 42 82 82 10

info@visitluxembourg.com

www.visitluxembourg.com

参考ウェブサイト

www.geoportail.lu

歴史

ルクセンブルクの国名の由来

ルクセンブルクの名称は、963年頃にジークフロイト伯爵がトリアーの聖マクシミン修道院から小さな砦を取得した時の契約書に初めて登場します。砦は、「ボック」として知られるアルゼット溪谷からそそり立つ岩崖の上にあり、「小さな砦」を意味するリュシリンブルフク(Lucilinburhuc)と呼ばれていました。これがルクセンブルクの名前の由来です。11世紀から13世紀にかけて、ルクセンブルク伯爵家はこの砦を足がかりに領土を拡大し、13世紀の終わり頃には、ムーズ川からモーゼル川にのびる広大な土地を支配するようになりました。

ルクセンブルク家からハプスブルク王朝へ

14世紀の幕開けとともに、ルクセンブルク家は皇位を継ぎ、ヨーロッパの大舞台で重要な役割を担うようになります。1308年、ルクセンブルク家のアンリ7世は選帝侯によって王に選ばれ、1312年には、ローマの教皇特使によって神聖ローマ帝国の皇帝を戴冠しました。アンリ7世の息子、ジャン盲目王はボヘミア王も兼ねていました。ルクセンブルク家からは、ほかにもシャルル4世(1346～1378年)、ヴェンセラズ(1376～1400年)、シジモン(1410～1437年)の3人が神聖ローマ皇帝に即位しています。このうち、シャルル4世が1354年にルクセンブルク伯領を公国に昇格させました。

1437年、皇帝シジモンの死と共に、ルクセンブルク家の男系の血は途絶えます。そして1443年、ブルゴーニュのフィリップ善良公がルクセンブルクの町を掌中に収め、ルクセンブルク公国はそれ以来、ネーデルラントの一地方となりました。その後4世紀にわたって公領はネーデルラントと運命を共にすることとなり、ブルゴーニュ公国(15世紀)に属したのちにスペイン・ハプスブルク家(16～17世紀)、さらにはオーストリア・ハプスブルク家(18世紀)の支配下となりました。その間の1684～1697年には、短期間ながらフランスの支配も受けています。ルクセンブルクはヨーロッパの覇権争いにおいて、それだけ戦略的に重要な位置を占めていたといえるでしょう。ヨーロッパの強国がその支配をめぐる争ったルクセンブルクの町は、次第に堅固な要塞へと姿を変え、「北のジブラルタル」の異名を持つようになります。1795年には、

フランス革命軍が要塞を制圧。ルクセンブルクはフランスに併合され、同国のフォレ県(département des Forêts)になりました。

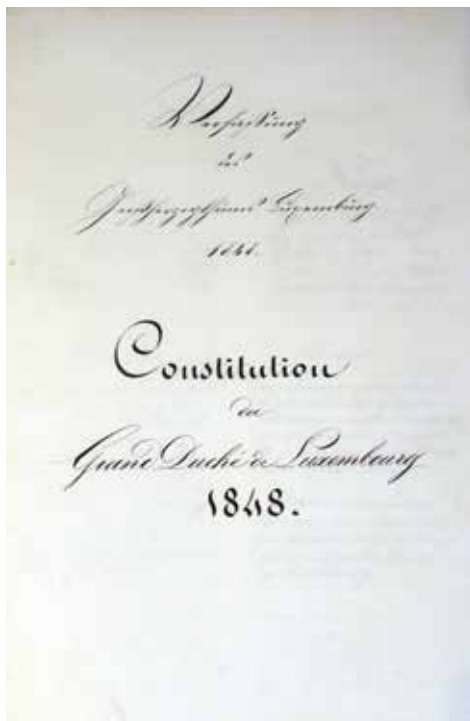
独立国家の誕生に向けて

1815年のナポレオン帝国の崩壊は、ルクセンブルクの状況にも影響を及ぼしました。同年、ヨーロッパの列強諸国はウィーン会議を開催し、広大なネーデルラント王国を創設して、フランスの野望を完全に阻止しようとしています。大公国に格上げされたルクセンブルクは、形式的には自治権を持っていたものの、実質的に統治していたのは、ネーデルラント国王でルクセンブルク大公であったオレンジ・ナッサウ家のギヨーム1世でした。同時に、ルクセンブルクがドイツ連邦に編入されたことにより、要塞内にはプロイセン軍が駐屯することになりました。

1830年、ベルギー革命が勃発した時、ルクセンブルク国民の一部はベルギーの革命派に同調してギヨーム1世の政策に対する不満を表しました。その後、列強は1831年にベルギー王国を設立して、ベルギーとオランダを分離させます。



首都に残る古い要塞群
© Christof Weber/SIP



© SIP

しかし、ルクセンブルクの処遇については、なかなか決まりませんでした。ベルギー議会とギヨーム1世の間で合意がされないまま、ルクセンブルクの要塞の町はオランダの支配下に残り、領内のその他の地域はベルギーの暫定政府が統治することになりました。

1839年4月19日、ロンドン条約により、ルクセンブルク大公国はベルギー領とオランダ領に分割されることになりました。この日は独立国ルクセンブルクの建国の始まりと考えられています。かつての公国のうち、フランス語圏はベルギーに割り当てられました。ルクセンブルク大公国の国境はこうして定められ、それ以来、今に至るまで変わっていません。一方、ネー

デルラントとは領土が離れていたために、大公もルクセンブルクに統治権を認めないわけにはいきませんでした。1841年に制定された憲章、続いて1848年、1856年、1868年に制定された憲法は、新生ルクセンブルクの国家制度の基盤となり、国民の基本的な権利と自由を保障するものになりました。現在の政治体制は、立憲君主制のもとでの議会制民主主義です。

ルクセンブルクでこの頃から芽生えた国民感情を、ルクセンブルク語による愛国心にあふれる歌や文学の登場に見ることができます。

1839年から第一次世界大戦まで

1839年のロンドン条約締結後も、ルクセンブルク大公国は引き続き、ドイツ連邦の一員としてドイツの影響下にあると同時に、同君連合を通じてオランダのオラニエ・ナッサウ家の影響下にありました。

農業国であり、人口流出率も高かったルクセンブルクにとって、経済的な自立は容易ではありませんでした。そこで、ギヨーム1世の息子であるギヨーム2世は1842年に、ルクセンブルクをドイツ関税同盟(Zollverein)に加盟させます。その後の19世紀後半には、国内で鉄鉱石が発見されたことと、石炭運搬用の鉄道が建設されたことがきっかけで、ルクセンブルクは一転して力強い経済成長を遂げます。労働力が必要とされたことから、19世紀後半には国外から多くの移民を受け入れるようになりました。

1867年のロンドン条約で、ルクセンブルク大公国の国際的地位は確固たるものになりました。ルクセンブルクは列強の署名による保証のもとで、非武装永世中立国となったのです。プロイセンの部隊は要塞から引き上げ、その後、要塞は解体されました。

ルクセンブルクとオランダの同君連合は、1890年、ギヨーム3世の死によって途絶えます。オラニエ・ナッサウ家の最後の男子継承者が亡くなった時、ルクセンブルク大公の位はナッサウ家の中でも唯一、男系が続いていた分家、ナッサウ・ヴァイルブルク家に引き継がれました。以来、ルクセンブルクは、アドルフ大公を初代とする独自の大公家を持つようになりました。

ロンドン条約でその地位を保証されたにもかかわらず、第一次大戦が勃発した1914年、ルクセンブルクはドイツの侵攻を受け、軍事的に占拠されます。ルクセンブルク政府はドイツの侵攻に激しく抗議しながらも、紛争当事者に対する絶対的な中立性を示しました。マリー・アデライード女大公と政府は権力の座にとどまり続けましたが、このことが第一次世界大戦後に政治的な影響を及ぼすことになります。



グルント
© Christof Weber/SIP

二つの大戦の間

1918年にドイツ軍が撤退したのち、左派勢力はマリイ・アデライード女大公がドイツに協力的な姿勢を示していたことを非難し、女大公の退位を要求しました。1919年1月には、妹のシャルロットが女大公に即位しました。

1919年9月、ルクセンブルク政府は、政治体制(君主制か共和制か)と経済の方針(関税同盟からの離脱要請に従うかどうか)に関する国民投票を行いました。初めて国民全員に投票権が与えられた国民投票において、国民は圧倒的多数で君主制を支持する一方で、経済についてはフランスとの経済同盟を支持しました。フランスが手を引いた後の1921年、ルクセンブルク政府はベルギーと経済同盟を結びます。これがベルギー・ルクセンブルク経済同盟(BLEU)です。ルクセンブルクはBLEU通貨としてベルギーフランを採用しましたが、同時にルクセンブルクフランの発行も限定的に続けていました。

終戦直後に落ち込んだ景気は、その後、回復し、好景気となります。しかし、1929年からはルクセンブルクもまた世界恐慌の影響を受けました。

ルクセンブルクは1930年代、中立的な立場を維持しながら、ジュネーブに本部を置く国際連盟で積極的に役割を担い、国際社会における地位を堅固なものにしていきました。



シャルロット女大公(1944年)
© Archives Cour grand-ducale

第二次世界大戦

1940年5月10日、ドイツ軍は再びルクセンブルクに侵攻しました。シャルロット女大公とルクセンブルク政府は亡命して連合国側に加わりました。

ドイツの占領下におかれたルクセンブルクの独立性は徐々に失われていきました。ナチスはドイツの民政を敷き、国家体制を破壊して国民をゲルマン化しようという姿勢をあらわにしました。国民にドイツ帝国を信奉させるために、絶え間ないプロパガンダキャンペーンが繰り広げられ、1942年からは青年たちがドイツ軍兵士として強制的に徴兵されるようになりました。他の被占領国と同様に、ルクセンブルクでも国民の大多数は、国民の強い結束力を示して抵抗運動を組織しました。占領軍は残虐な圧政と追放でそれを抑え込みました。こうして第二次世界大戦中に命を落としたルクセンブルク国民は、全人口の2%にのぼりました。

1944年、ルクセンブルクは連合国軍によって解放され、マーシャルプランによって近代化とインフラ開発が進められることになりました。



ルクセンブルク国民の自由と抵抗を象徴する慰霊碑「黄金の貴婦人(Gelle Fra)」
© SIP

世界に開かれた国家へ

第二次世界大戦は、ルクセンブルクに外交政策の転換をもたらしました。連合国軍側で戦った結果、ルクセンブルクは中立主義を放棄し、戦後は多国間の協調を目指す国際機関の構築に加わるようになりました。ルクセンブルクは国際連合(UN)、ベネルクス、欧州経済協力機構(OEEC)、ブリュッセル条約、北大西洋条約機構(NATO)の設立当初からの加盟国です。

ルクセンブルクはヨーロッパの創建に積極的に貢献しました。1951年に欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)、1957年には欧州経済共同体(EEC)の設立に原加盟国としてかかわりました。ECSCは新たな成長の時代の幕開けを告げるものであり、またEECへの加盟は経済の拡大のきっかけとなりました。

ECSCの最初の拠点都市となったルクセンブルク市はストラスブールやブリュッセルと並んで、次第にヨーロッパ共同体の諸機関を擁するようになりました。

21世紀を迎えて

今日、ルクセンブルクはヨーロッパ、そして世界において重要な役割を担っています。欧州連合およびヨーロッパ圏のメンバーとして、ルクセンブルクは欧州統合を積極的に推進しています。国際貢献に取り組む姿勢は、政府開発援助(ODA)の総額が国民総所得(GNI)の1%を占めている点にも表れています。GNIの0.7%以上を開発援助に拠出している国は世界でも5カ国しかありません。

人口の45.3%が外国人居住者であるルクセンブルクは、開放的な国家のモデルであり、ヨーロッパの縮図と見なされています。小規模だからこそ、人間味のある調和のとれた国というイメージを保つことができているのです。



キルシュベルク地区
© Christof Weber/SIP

関連機関

Archives nationales de Luxembourg

(ルクセンブルク国立公文書館)
Plateau du Saint-Esprit
L-1475 Luxembourg
Tel.: (+352) 247-86660
archives.nationales@an.etat.lu
www.anlux.lu

Bibliothèque nationale de Luxembourg

(ルクセンブルク国立図書館)
37, boulevard F.D. Roosevelt
L-2450 Luxembourg
Tel.: (+352) 22 97 55-1
info@bnl.etat.lu
www.bnl.lu

Musée national d'histoire et d'art

(国立歴史美術博物館)
Marché-aux-Poissons
L-2345 Luxembourg
Tel.: (+352) 47 93 30-1
musee@mnha.etat.lu
www.mnha.lu

Musée Dräi Eechelen

(3つのドングリ博物館)
5, Park Dräi Eechelen
L-1499 Luxembourg
Tel.: (+352) 26 43 35
info@m3e.public.lu
www.m3e.lu

Musée d'histoire de la Ville de Luxembourg

(ルクセンブルク市歴史博物館)
14, rue du Saint-Esprit
L-1475 Luxembourg
Tel.: (+352) 47 96-4500
mhvl@2musees.vdl.lu
www.mhvl.lu

Centre virtuel de la connaissance sur l'Europe

(ヨーロッパに関するバーチャルリソースセンター)
Château de Sanem
L-4992 Sanem
Tel.: (+352) 59 59 20-1
info@cvce.eu
www.cvce.eu

政治

ルクセンブルク大公国は、1839年4月19日にロンドン条約が締結されて以来、独立した主権国家です。立憲君主制のもとでの議会制民主主義を採用し、ナッサウ家が代々、国家元首を世襲で継承しています。

議会制民主主義の常として、ルクセンブルクでも、権力は柔軟に分散されています。立法権と行政権の間には多くのつながりがあります。司法権だけが完全に独立しています。

立法権

立法手続きは国民議会、政府、国家諮問院が行います。

国民議会（代議院）は立法権を持つ唯一の機関です。60議席から成り、議員の任期は5年で、直接選挙で選出されます。議会の主な役割は、政府および議員が提出した法案を投票で議決することです。議員は発議権を持ち、議会に法案を提出することができます。

また大公も立法手続きを開始することができますが、これは実際には**政府**によって実行されます。政府の発議権として知られるこの手続きは、今では標準的慣習で、これにより、政府は（通常、政府が多数派である）議会に法案を提出することができます。議会で可決された法律は、大公が公告・公布します。法律は官報（Mémorial）に掲載されることにより発効します。

国家諮問院は21名の諮問員で構成される執行機関です。諮問員の任命および罷免は大公が行います。

立法手続きに際しては、国家諮問院は、政府や議員が国民議会に提出したすべての法案について、議員の採決に先立ち、答申を行う役割を担っています。採決は、同一法案について2回行われ、第1回と第2回の間は少なくとも3ヶ月の期間をあげることになっています。ただし、国家諮問院の同意があれば、議会は2回目の採決を省略できることになっており、そのようなケースがむしろ一般的になっています。

大公令に関しては、草案を必ず国家諮問院に提出し、答申を求める必要があります。ただし、大公が緊急事態であると見なす場合は例外です。

また、すべての法案の修正案や草案、大公令の草案に関して答申を行うことも、国家諮問院の役割です。答申を行うにあたって、国家諮問院は、法案が憲法



国民議会
© Chambre des députés

や国際協定、国際条約、一般法などの上位法と整合性を保っていることを事前に確認しなければなりません。

行政権

行政権を握っているのは大公と、憲法に基づく大公の権限行使を補佐する**政府の閣僚**です。

大公は国家元首です。大公の人格は不可侵であり、罪に問うことはできず、告発も告訴もできません。大公が責任を負わないということは、つまり閣僚が責任を負うことを意味しています。大公が法案を提出した法律が施行される時は、閣僚の1人が連署し、全責任を負うことになります。この責任とは、閣僚が役割上、直接的あるいは間接的にかかわる法律については一般的に担っている性質のものです。責任は政治責任である場合もあれば、刑事または民事の法的責任が問われる場合もあります。原則として、大公(政府)提出法案はいずれも、大公が署名する前に、政府諮問委員会の審議にかける必要があります。

憲法の定めにより、大公は政府の構成を自由に決定できる正当な権利を持っています。すなわち、省庁の創設や分割、大臣の任命などを行うことができます。実際には、大公は5年に1度の国政選挙の結果に従い、「組閣調査官(informateur)」「(組閣準備の指南役として任命される人物)と「組閣役(formateur)」「(実際に組閣を任される人物)を選びます。後者は通常、首相になります。それから大公は、組閣役が提示した閣僚メンバーを任命し、宣誓させます。大抵の場合、省庁の数は閣僚の数よ



(息子の)皇太子殿下を伴ってナショナルデーの祝典に参加する大公殿下

© SIP/Jean-Christophe Verhaegen

り多いので、1人の大臣が複数の大臣職を兼任することも少なくありません。

新政府は基本方針を国民議会に示し、国民議会は信任投票を行って支持を表明します。したがって、政府与党は議会において多数派です。

政府および各大臣は、自らの活動について国民議会で質問に答える必要があります。政治責任を問われた大臣は、国民議会が不信任決議案を可決した場合、辞職を求められます。通例としては、第1回の投票で不信任決議がなされたところで、大臣は辞職します。憲法によって大公は閣僚をいつでも解任できる権利を持っています。しかし実際は、大臣あるいは政府は首相を通じて大公に辞職を申し出ます。

司法権

裁判所は、憲法によって司法権の行使が認められており、それぞれ独立してその権利を行使しています。

憲法裁判所の他に、司法裁判所(最高裁判所、地方裁判所、治安判事裁判所)と行政裁判所(行政裁判所、行政審判所)という2種類の司法の場があります。

関連機関

Chambre des députés

(国民議会)

23, rue du Marché-aux-Herbes
L-1728 Luxembourg
Tel.: (+352) 46 69 66-1
chd@chd.lu
www.chd.lu

Conseil d'État

(国家諮問院)

5, rue Sigefroi
L-2536 Luxembourg
Tel.: (+352) 47 30 71
info@conseil-etat.public.lu
www.conseil-etat.public.lu

Palais grand-ducal

(大公宮殿)

17, rue du Marché-aux-Herbes
L-1728 Luxembourg
Tel.: (+352) 47 48 74-1
service.presse@gdl.etat.lu
www.monarchie.lu

Service information et presse du gouvernement

(ルクセンブルク政府広報局)

33, boulevard F.D. Roosevelt
L-2450 Luxembourg
Tel.: (+352) 247-82181
info@sip.etat.lu
www.gouvernement.lu
www.luxembourg.lu

Service central de législation

(中央法制局)

43, boulevard F.D. Roosevelt
L-2450 Luxembourg
Tel.: (+352) 247-82960
scl@scl.etat.lu
www.legilux.lu

参考ウェブサイト

www.etat.lu
www.justice.public.lu

国家の象徴

国旗

最初の国旗として知られているのは、1123年にルクセンブルク伯ギヨーム1世が用いたものです。黄色と赤の横縞模様の旗だったと考えられています。

現在のルクセンブルク国旗は、赤・白・空色の水平3色旗です。オランダの国旗に似ていますが、オランダの国旗は空色の代わりにコバルトブルーを用いています。

近代の3色旗は、多かれ少なかれ、フランスの第一共和政の3色旗を元にしています。オランダでも、1795年にフランスの影響を受け、パタヴィア共和国によって赤・白・青の3色旗が正式な国旗と定められました。

ルクセンブルクの国旗と紋章は、1972年6月23日付の国章法によって保護されています。1993年7月27日付大公令により、国旗の赤の色はPantone 032 C、青の色はPantone 299 Cと定められました。



© Christof Weber/SIP

国歌

国歌は、1859年の『Ons Heemecht 我が祖国』の最初と最後の詩節から構成されており、ジャン＝アントワーヌ・ツイネンの曲に合わせて、詩人のミシェル・レンツが歌詞をつけたものです。1864年、エテルブルックで行われた盛大な式典において初めて公式の場で演奏されました。

ルクセンブルクの国歌は、平和を願うものです。平和と繁栄を想起させる雰囲気にもまれており、1839年に独立を成し遂げた時のおおいな喜びを表現しています。

大公家の賛歌

トランペットの音色、あるいは騎兵隊のファンファーレをイメージして作られたこの曲は、16世紀までは書き残されていませんでした。『Wilhelmus』は公式行事において大公家が登場および退場される際に演奏されます。

国の記念日(ナショナルデー)

ルクセンブルクでは、18世紀末から君主の誕生日を祝う習慣がありました。しかし、シャルロット女大公の誕生日は1月23日だったため、その長い治世(1919～1964年)の間、つねに真冬に行われていました。

主に気候上の理由により、1961年12月23日付の大公令で、君主の誕生日を国民が祝う日は、6月23日と定められました。祝典は前夜から始まります。

条文には、「国の記念日」という言葉は出てきません。この日は「大公の誕生日を国民が祝福する日」と説明されています。

紋章

ルクセンブルクの紋章の起源は中世にさかのぼります。定めたのはルクセンブルク伯アンリ5世で、1235年頃のことでした。しかし、さかのぼって1123年には、ルクセンブルク伯ギヨーム1世は横帯が入った紋章旗を騎馬姿の印形につけていました。初期のルクセンブルク家の継承者の多くは、横帯の柄を好み、ナミュール家の継承者らはライオンのモチーフを好んでいました。

大公紋章には、小紋章、中紋章、大紋章という3つの種類があります。銀白と青の10本の横帯に、後ろ足で立ち上がった赤色のライオンが描かれています。ライオンは冠をかぶり、爪を立て、舌を出していて、二股に分かれた尾が交差しています。

この紋章は1972年6月23日付の国章法で法的に保護されており、さらに1993年7月27日の法律で、同法の改正と補遺が行われました。



大公宮殿の紋章
© Christof Weber/SIP

関連機関

Archives nationales de Luxembourg

(ルクセンブルク国立公文書館)
Plateau du Saint-Esprit
L-1475 Luxembourg
Tel.: (+352) 247-86660
archives.nationales@an.etat.lu
www.anlux.lu

Commission héraldique de l'État

(ルクセンブルク国家紋章委員会)
4, rue de la Congrégation
L-1352 Luxembourg

経済

ルクセンブルクは、1840年代に南部で鉄鉱石が発見されたことがきっかけで、経済的に豊かになりました。フランス・ロレーヌ地方で産出される鉄鉱石の名称にちなみ、この地方全体が「ミネット」と呼ばれるようになり、それ以来、ルクセンブルクは農業国から工業国へと転身を遂げました。

産業

19世紀半ばにさかのぼるルクセンブルク初期の産業において圧倒的な割合を占めていた鉄鋼生産は、1950年以降に大規模な成長を遂げました。この頃、ルクセンブルクに進出した最初の米国企業の中には、グッドイヤー(Goodyear)(タイヤ製造業)、デュポン・ド・ヌムール(DuPont de Nemours)(ポリエステル製造業)、モンサント(Monsanto)(ナイロン繊維製造業)などが含まれています。それと同時に金融セクターも発展しました。

1970年代の鉄鋼危機および石油危機は、当時ルクセンブルク経済の支柱であった鉄鋼業に甚大な影響を及ぼしました。

1980年に産業の多角化が進められると、ルクセンブルクの企業への融資に特化した公営金融機関、国立信用投資公社(Société nationale de crédit et d'investissement)と産業特区が創設され、約100社の企業が新たに事業を開始しました。その結果、ルクセンブルクの国内総生産(GDP)における鉄鋼業の割合が低下し、その他の産業の割合は上昇しました。

2002年、ブルバハ、アイヒ、そしてデュドラランジュの鉄鋼連合であるアルベッド(ARBED: Acières réunies de Burbach, Eich, Dudelange)が、同じく鉄鋼企業のユジノール(Usinor)およびアセラリア(Aceralia)と合併して、世界有数の鉄鋼企業、アルセロール(Arcelor)が誕生しました。アルセロールは2006年、ミタル・スチール(Mittal Steel)と合併し、世界をリードする鉄鋼生産会社、アルセロールミタル(ArcelorMittal)グループを設立しました。

2004年以降、政府は新たな経済多角化政策を実施し、複数分野での専門性構築に力を注いでいます。そのような分野は、情報通信技術、ロジスティクス、医療科学技術、環境技術など多岐にわたっています。



© ArcelorMittal

金融センター

ルクセンブルクの金融センターは、1960年代から1970年代にかけて、もっぱらユーロ債市場に特化した形で発展しました。その後はプライベートバンキングの中心地として、また1980年代以降は投資ファンドの拠点および運用センターとしても成長を遂げました。このような成功の背景には、ルクセンブルクが政治的にも社会的にもきわめて安定しているという事情があります。また、時代に即した法規制の枠組みがあり、しかも政府と規制当局、民間セクターが常に対話を行い、市場の変化に合わせて調整を行っていることも大きな魅力です。

現代的な法制度が整備され、世界に門戸を開いたことで、ルクセンブルクは、世界中から銀行や保険会社、投資運用会社、その他の専門サービス企業を惹きつけてきました。ルクセンブルクの金融センターは実に多様化しており、官民を問わず、海外の顧客に幅広いサービスを提供しています。また、多文化および複数言語に対応する専門家チームが国境を越えて金融商品やサービスを提供しており、その分野で比類のない専門能力の構築に成功しています。

見識と行動力を備えた規制当局の監督のもとで、ルクセンブルクの金融センターは投資家保護を推進する風土を作り上げた一方、マネーロンダリングに対しては厳しい規制を適用してきました。

ルクセンブルクの金融センターは今日、米国に次いで世界第2位の規模を誇る投資ファンドセンターであると同時に、EUで最大のキャプティブ再保険市場、国境を越えた生命保険提供においてはEUを牽引する中心地、海外顧客に向けてはユーロ圏内で随一のプライベートバンキングセンターにもなっています。ルクセンブルクはまた、ヨーロッパにおいて最大のイスラム金融の拠点であり、中国人民元の国際化のビジネスでも、複数分野でヨーロッパの主要なビジネス拠点となっています。



© Getty Images/iStockphoto/Thinkstock

情報通信産業、メディア、宇宙工学、映像産業

ルクセンブルクはつねにヨーロッパのメディアシーンの先端を走ってきました。メディアおよび通信分野の巨大企業2社がルクセンブルクで誕生し、今も成長を続けています。このうち1社は、ヨーロッパの主要テレビ・ラジオネットワークのRTLグループ(RTL Group)で、もう1社は50機以上の衛星を有する世界最大の衛星通信事業者、SESです。

メディア統合が進み、情報通信技術の進歩も著しい近年では、それらの分野で活発に事業を展開する多くの企業がこの2大企業を核にルクセンブルクに集積してきました。

先端技術における革新的なプロジェクトを通じて国の経済構造を戦略的に発展させる継続的な努力の一環として、ルクセンブルクは2005年、欧州宇宙機構加盟を機に、宇宙工学セクターの拠点を徹底的に整備しました。

この分野の多角化を目指した政府の取り組みにより、ヨーロッパの主要ネットワークハブとの卓越した高速通信環境が実現、高レベルのデータセンターが設置され、情報通信産業に好ましい規制環境も整いました。また、国内のIT専門家の割合は世界有数です。さらに、政府は情報セキュリティおよび高性能通信ネットワークを研究開発の優先分野としています。

このような背景を受けて、情報通信産業分野では、多数の中小企業に加えて世界的な大企業もルクセンブルクに拠点を設けています。その中には、アマゾン(Amazon.com)やイーベイ(eBay)、ペイパル(PayPal)、アイチューンズ(iTunes)、ボーダフォン(Vodafone)などが含まれます。これらの企業はいずれも、ルクセンブルクをデータ処理やe-コマース、通信といった業界のハブであると認めているのです。

映像産業においても、政府がこの分野の育成のため、助成金のスキームも含めた積極的な政策を講じており、その成果が表れています。



SESのデジタル・ネットワーク・オペレーション室
© Toby Smith/Reportage by Getty Images

ロジスティクス

ルクセンブルクは地理的にヨーロッパ市場の中心にあり、アントワープやロッテルダムといったヨーロッパの主要貨物港からも適度な距離にあるため、ロジスティクス関係の活動には理想的なゲートウェイになっています。しかし、単純な物品運搬を行っているわけではありません。目指しているのは、付加価値の高いサービス(パッケージング、ハンドリング、発送、インボイス業務)の提供です。

ロジスティクス分野において、ルクセンブルクは複数のグローバル企業の拠点になっています。その中にはカーゴルクス(Cargolux)、チャイナ エアライン(China Airlines)、コベルフレット(Cobelfret)、DBシェンカー(DB Schenker)などがあります。

ルクセンブルク国際空港はヨーロッパのロジスティクスを牽引する場所のひとつです。このセクターは2014年、空港近くにフリーポート・ルクセンブルクが設けられたことにより、さらに強化されました。22,000 m²におよぶこのフリートレードゾーンには、美術品や高級品の保護、保管、管理について新たな基準が設定されています。



© MECO/Marc Schmit

研究開発とイノベーション

近年、ルクセンブルク政府は研究開発とイノベーションに大規模な投資を行い、この分野に直接・間接的な支援を継続的に提供しています。

企業や民間研究機関のイノベーション能力を刺激するため、研究開発およびイノベーションを推進する法的枠組みが2009年6月に策定されました。

政府はルクセンブルク大学の施設と、エシュベルヴァルの科学都市(Cité des sciences)における研究・イノベーション施設の建設および整備に7億ユーロを拠出するのに成功しました。

近年、政府は急成長する最先端部門において経済的な多様化を促進するため、医療テクノロジー分野の研究開発に約1億4,000万ユーロという大規模な投資を行っています。

ルクセンブルクの研究開発体制を確立し整備するため、2015年、政府はガブリエル・リップマン国立研究センター(Centre de recherche public Gabriel Lippmann)とアンリ・テューダー国立研究センター(Centre de recherche public Henri Tudor)を合併させて、ルクセンブルク科学技術研究所(Luxembourg Institute of Science and Technology)を設立しました。また、ルクセンブルク統合バイオバンク(Integrated Biobank of Luxembourg)と公立保健研究所(Centre de recherche public de la Santé)を合併させて、ルクセンブルク保健研究所(Luxembourg Institute of Health)を設立しました。政府は、研究およびイノベーションを重点政策に据えています。このことから常に優先事項であり、2014年から2017年にかけてルクセンブルク大学や公共の研究機関、国立研究基金(Fonds national de la recherche)に11億ユーロも国家予算を割いていることから見てもとれます。

さらに政府は、製品やサービスを生み出すあらゆる活動を持続可能な経済発展の見地から見直すために、環境技術の発展促進にも力を入れています。

国立信用投資公社は、数多くの商品のひとつとして、研究開発およびイノベーションの支援に特化した融資サービスも提供しています。



© MECO/Luc Deflorenne

関連機関

Ministère de l'Économie

(ルクセンブルク経済省)

19-21, boulevard Royal

L-2449 Luxembourg

Tel.: (+352) 2478-2478

info@eco.public.lu

www.gouvernement.lu/ministeres-administrations

Ministère des Finances

(ルクセンブルク財務省)

3, rue de la Congrégation

L-1352 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-82600

Ministere-Finances@fi.etat.lu

www.gouvernement.lu/ministeres-administrations

Luxembourg for Business

19-21, boulevard Royal

L-2449 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-84116

info@luxembourgforbusiness.lu

www.luxembourgforbusiness.lu

Luxembourg for Finance

12, rue Érasme

L-1468 Luxembourg

Tel.: (+352) 27 20 21-1

lff@lff.lu

www.luxembourgforfinance.com

Société nationale de crédit et d'investissement

(国立信用投資公社)

7, rue du Saint-Esprit

L-1475 Luxembourg

Tel.: (+352) 46 19 71-1

snci@snci.lu

www.snci.lu

参考ウェブサイト

www.innovation.public.lu

www.guichet.lu

人口

1870年頃に工業化が始まって以降、ルクセンブルクの人口は大幅に増加しました。最大の理由は、19世紀後半以来、移民の流入が絶えなかったことにあります。1910年のルクセンブルクの人口は26万人でしたが、2014年1月には54万9,700人になっており、この約100年で人口は2倍以上に増えたこととなります。

ただし、増加の割合は常に一定ではなく、人口の変動は、大きく4つの時期に分けることができます。20世紀の最初の40年には、減少が続き、また1950年代から1960年代にかけては、(穏やかながら)ベビーブームがありました。1970年代には著しい減少があり、1990年代からは特に移民の増加による出生率の上昇によって、人口は再び増加しはじめました。

多様性のある社会

第一次世界大戦までは、特に経済的な理由から、明らかに海外への人口流出傾向が見られました。しかし、19世紀後半の産業の発達以降、ルクセンブルクは徐々に、人口が流出する国から流入する国へと変わりました。その後、1960年代から1970年代にかけても移民が急増した時期があり、積極的な移民受け入れ政策によって、イタリアやポルトガルから多くの人々が、鉄鋼業や建設業の仕事を求めてルクセンブルクに移住しました。

現在では、ルクセンブルクの人口の半数近くはルクセンブルク国籍ではありません。外国人居住者は24万8,900人で、全人口の45.3%を占めています。そのうち約86%は28のEU加盟国の出身です。特に大きな存在となっているのは、ポルトガル(36%)、フランス(15%)、イタリア(8%)、ベルギー(7%)のコミュニティです。ルクセンブルクには、実に160カ国以上の国籍の人々がいます。

社会構成の変化

・ 人口統計

ルクセンブルクの人口は、安定的に増加しています。2013年における女性1人あたりの出生率は1.55人でした。出生総数については2000年以降、多少の変動はありましたが、6,115人に増えました。このうち約50%は外国人居住者による出生数です。

2014年初頭においては、ルクセンブルクの人口の29%は25歳未満の若年世代で構成されています。25-64歳は57%、65歳以上は14%でした。

平均寿命については、ルクセンブルクはヨーロッパで最も寿命が長い5カ国の1つに入ります。2012年には、女性の平均寿命は84.3歳、男性の平均寿命は79.5歳の記録を達成しました。男性と女性の平均寿命の差は比較的小さく、年を追うごとに縮小しています。

・ 人口と雇用

20世紀の後半に、就労者数は安定して増加しました。過去10年においては、フランスやベルギー、ドイツから国境を越えて通勤する人の数が倍増し、2013年には16万人を超えました。給与所得人口のうち、71%が越境通勤者(45%)および外国人居住者(26%)です。

女性の就業率は着実に上昇しており、2012年には64.1%に達しました。



© Digital Vision/Getty Images/Thinkstock

ルクセンブルク国籍

ルクセンブルクの改正国籍法は、2008年10月23日に成立し、2009年1月1日に発効しました。改正の目的は、国籍に関する法制度を社会の変化に見合うものにする事です。

ルクセンブルクの国籍は、出生、養子縁組(血縁上の家族との関係を断つ場合も断たない場合も)、帰化により取得できます。国籍を取得した外国人居住者には、ルクセンブルクの市民権とともに、公民権、参政権が保証されます。

帰化を希望する人は、以下の条件を満たす必要があります。

- ・ 申請書提出の時点で18歳に達していること
- ・ 申請時点において、少なくとも7年間連続でルクセンブルクでの在留許可を取得しており、実際に同期間、ルクセンブルク国内に居住していること
- ・ ルクセンブルクの公用語であるフランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語のうち、少なくとも1つの言語の実用能力が十分にあり、ルクセンブルク語の会話力評価試験に合格していること(ルクセンブルクの学校教育を7年以上受けている場合や、1984年12月31日以前に発行された在留許可を持ち、その日以降、ルクセンブルクに居住している場合を除く)

- ・ 市民教育講座に少なくとも3回出席していること(ルクセンブルクの学校教育を7年以上受けている場合や、1984年12月31日以前に発行された在留許可を持ち、その日以降、ルクセンブルクに居住している場合を除く)
- ・ 素行の善良性に関する評価基準を満たしていること

大きな改正点は、二重国籍に関する方針を緩和したことです。ルクセンブルク国籍を申請しても、元の国籍を放棄する必要がなくなりました。さらに、他国の国籍を自主的に獲得した場合も、ルクセンブルク国籍を喪失することがなくなりました。

同法では、ルクセンブルク国籍の喪失、失効、再取得、証明、放棄についても定めています。

関連機関

Ministère de la Justice

(ルクセンブルク法務省)

Centre administratif Pierre Werner

13, rue Érasme

L-1468 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-84537

info@mj.public.lu

www.gouvernement.lu/ministeres-administrations

Institut national de la statistique et des études économiques (Statec)

(ルクセンブルク国立統計局)

Centre administratif Pierre Werner

13, rue Érasme

L-1468 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-84219

info@statistiques.public.lu

www.statistiques.lu

言語

ルクセンブルクの言語環境の特徴としては、ルクセンブルク語とフランス語、ドイツ語の3言語が公用語として認められ、用いられていることが挙げられます。

歴史

ルクセンブルクの多言語主義は、ローマ系とゲルマン系の民族が共存してきた歴史に根ざしています。

14世紀、領土は2つに分かれていました。フランス圏ではワロン語が、ドイツ語圏ではルクセンブルク方言が使われていました。当時、フランス語とドイツ語は書き言葉であり、公用語でした。ルクセンブルク市はドイツ語圏に位置していましたが、例外的にフランス語が標準とされていました。

17世紀のフランス領時代になると、ドイツ語はあまり使われなくなりました。また18世紀末にフランスに併合されてからはフランス語の使用がいっそう盛んになり、ドイツ語圏の地方自治体でさえ、フランス語が使われるようになりました。1804年にナポレオン法典(フランス民法典)が公布されて以来、その影響は今日まで残っており、法律においては唯一フランス語が用いられています。

1830年、1832年、1834年の大公令により、ドイツ語とフランス語を自由に選択できる権利が定められました。行政の分野では、有力者が使っていたフランス語がドイツ語よりも明らかに優勢でした。対照的に、政治的な文書では、たとえば法律や法令に関する通知などは、誰もが理解できるようにドイツ語が用いられました。初等教育で扱う言語はドイツ語に限定され、中等教育からフランス語が加わることになりました。

1839年のロンドン条約および領土分割により、新たに独立国となったルクセンブルクの領土はドイツ語圏に完全におさまることになりました。しかし、ルクセンブルクの有力者は、行政や司法、政治の世界でフランス語を使い続けました。1843年7月26日付の法律により、初等教育にフランス語が導入され、フランス語はドイツ語と並んで必修科目になりました。ドイツ語とフランス語の2言語併用については、1848年に制定された憲法にも、国民はドイツ語とフランス語のいずれも自由に選べると明記されています。



© SIP

19世紀には、人々はフランス語とドイツ語の他に、日常会話ではモーゼルフランコニアン方言を話していました。これは、19世紀末までルクセンブルクドイツ語として知られていたものです。その後、国民意識の高まりとともに、ルクセンブルク語がルクセンブルク国民の母国語として定着し、1912年には小学校の科目として教えられるようになりました。ルクセンブルクの人々が自分たちの言葉に特に愛着を示したのは、第二次世界大戦中においてです。ドイツの占領下でゲルマン化政策が進められるなか、ルクセンブルク語は抵抗と国民の団結を象徴する言語でした。



© SIP

今日の状況

1984年2月24日付の言語体制に関する法律によって、ルクセンブルク語はついに国語として認められました。ルクセンブルク語は、フランス語とドイツ語と並び、行政や司法で用いられる言語となりました。行政にルクセンブルク語が取り入れられたのは初めてのことで、

1989年には、ルクセンブルク語はEUのリング・プログラムの対象言語として認められました。同プログラムは言語教育および学習を推進し、言語の社会的文化的意義を明確にする取り組みです。

ルクセンブルク語の体系化を求める声が強まる中、ルクセンブルク語に関する常設委員会 (Conseil permanent de la langue luxembourgeoise) の設立および1999年の表記改正により、教科書や文法、辞書などが整備されました。

ルクセンブルク語に関するもうひとつの重要な変化として、2008年10月23日に制定され、2009年1月1日に施行されたルクセンブルク国籍に関する法律は、ルクセンブルク語の実用的な知識を国籍取得の条件の1つとしており、ルクセンブルク国民として社会に溶け込むためにはルクセンブルク語が必須という認識が明らかになりました。

さらに、2009年5月22日付の法律で、職業としてのルクセンブルク語教師の立場が明確になり、「ルクセンブルクの言語と文化に関する能力証明」(Zertifikat Lëtzebuenger Sprooch a Kultur) が制定され、ルクセンブルク語の立場が強化されました。これは、ルクセンブルク語の会話力と指導力、またルクセンブルクの社会や文化に関する知識の認証制度です。2009/2010年度より、ルクセンブルク大学では、修士課程の「ルクセンブルク学—言語・文化・メディア」(master en langues, cultures et médias - Lëtzebuenger Studien) が開講しており、これにより、ルクセンブルクの言語、文学および文化を初めて大学で学べるようになりました。

ルクセンブルクでは、多様な移民を受け入れ、今日では外国人居住者が人口の約半数を占めるようになった歴史的背景を受け、現在ではフランス語とドイツ語の二言語併用主義から、多言語主義へと移り変わっています。それでも、フランス語とドイツ語の使用を考え直そうという動きはありません。これら二言語の重要性は、単に政治的な理由によるものではなく、

ルクセンブルクのローマ民族とゲルマン民族の世界の共存から生まれた国としてのアイデンティティを示すものでもあります。フランス語とドイツ語の両方が公用語であることで、ルクセンブルクはローマ文化とゲルマン文化、そしてより新しい他の文化が出会う地の象徴であり続けるのです。ルクセンブルク語の重要性の高まりにより、従来の二言語併用主義はさらに強く、豊かな意味を持つようになりました。



© SIP

多言語主義の社会政治的側面

多言語主義はルクセンブルクの日常生活に深く根づいており、社会のあらゆるレベルに浸透しています。

一般的には、国語であるルクセンブルク語が職場、学校、家庭でもっとも広く話されています。ポルトガル語を話す大きなコミュニティがあることを反映して、次によく話されているのはポルトガル語、その後にはフランス語とドイツ語が続きます。ただし、言語環境は話題となるトピック(分野)によって少しずつ異なります。

政治

国民議会(代議院)で使用する言語は正式には決められておらず、議員の選択に任せられています。通常の討論はルクセンブルク語で行われますが、政府への質問は通常、フランス語で行われます。法律はもっぱらフランス語で起草されます。



© SIP

行政

1984年の法律の規定では、行政および司法が関わる事柄においては「フランス語、ドイツ語、ルクセンブルク語のいずれを用いてもよい」となっています。市民は行政機関に提出する申請書類を書く際に3つの言語のいずれを用いてもよく、行政の担当者は、「可能な範囲において」同じ言語で回答をしなければなりません。行政関係の書き言葉としてはフランス語が日常的によく用いられていますが、話し言葉としては(職場および一般的なコミュニケーションにおいて)ルクセンブルク語がよく用いられます。

教育

言語教育は、ルクセンブルクの教育制度において重要な位置を占めています。学校で多言語が用いられる伝統があることは、生徒たちにとっては大きなメリットであると言えますが、同時に、生徒の国籍が多様化するにつれて課題も生まれています。生徒の約半数は、家庭での第一言語としてルクセンブルク語以外の言語を使っています。

ドイツ語は、初等教育第2サイクルの1年目にあたる小学校1年生(6歳)で学びます。フランス語は2年生で学び始めます。初等教育、中等教育および中等技術教育の最初の数年の共通語はドイツ語です。中等教育では、4年目からフランス語が主言語になります。

英語は中等教育および中等技術教育で初めて学びます。生徒はほかにも、ラテン語、スペイン語、イタリア語を選択できます。

全教育課程で言語教育はカリキュラム全体の50%を占めています。

メディア

活字媒体では、ドイツ語が主流ですが、伝統のある日刊新聞や一部の週刊新聞ではフランス語も定着しています。ルクセンブルク語で記事が書かれることは、今でも例外的です。

20~30年前から、ルクセンブルク在住の外国人コミュニティや越境通勤者向けの日刊紙や週刊誌、定期刊行物など、さまざまな出版物が発行されています。そうした出版物で主に使われている言語はポルトガル語、フランス語、英語です。



© SIP/Charles Caratini

ラジオの全国ネットや地方放送局で用いられている言語はルクセンブルク語が主流ですが、その他の言語(主にフランス語と英語)が圧倒的に話される地域では、番組編成やリスナー層によって違いがあります。

唯一のルクセンブルクの放送局ではもっぱらルクセンブルク語が使われていますが、ニュース番組にはフランス語またはドイツ語の字幕がつきます。2008年秋からは、フランス語の5分間ニュースが放送されるようになりました。

文化

ルクセンブルクのアートシーンにおいて、それぞれの言語は独自の役割を果たしています。芸術の種類によって、重要とされる言語は異なります。

文学や出版の分野では、最近でこそルクセンブルク語の割合がかつてない勢いで伸びていますが、今も多くの作品が、著者の好みに応じてフランス語あるいはドイツ語で書かれています。書店に並んでいる出版物はフランス語とドイツ語のものが中心ですが、ルクセンブルク語や英語、さらに他の言語のものも見られます。特定の言語の出版物だけに特化した書店もあります。2010年6月24日付の公立図書館に関する法律により、公立図書館は、1984年2月24日付の言語体制に関する法律において制定された通り、知識や文化の主要分野については、関連するトピックの出版物を少なくとも3カ国語で利用者に提供することが求められています。

演劇の分野では、ルクセンブルク語、フランス語、ドイツ語、英語の作品を観ることができます。ルクセンブルクの劇団の他にも、ドイツやフランス、ベルギーの著名な劇団が原語で公演を行います。

映画館では、外国映画は常に原語で上映され、フランス語やオランダ語、時にはドイツ語の字幕がつきます。

職場および社会生活で使われる言語

ルクセンブルクにおける社会生活では、地域や活動内容によって多少の違いはあるものの、複数の言語がごく自然に共存し、時には同時に用いられることもあります。

労働人口に外国人居住者や、フランス・ベルギー・ドイツからの越境通勤者が占める割合が多いため、職場でのコミュニケーションの手段としては、フランス語が最も一般的に使われています。次いで、ルクセンブルク語、ドイツ語、英語、ポルトガル語が使われます。

商業施設や、ホテル、レストラン、カフェなどでよく使われているのはフランス語で、特に首都やその近辺ではその傾向が強く見られます。唯一の例外は北部地方で、フランス語よりもルクセンブルク語の方が優勢です。

EU機関や金融機関、製造・サービス業でも組織が大きく国際的な場合は英語が共通語として使われています。

ポルトガル移民のコミュニティが大きいことから、職場や余暇を過ごす場では、ポルトガル語が使われていることもよくあります。

ルクセンブルク語の言葉

<i>Moien</i>	こんにちは
<i>Äddi</i>	さようなら
<i>Jo</i>	はい
<i>Nee</i>	いいえ
<i>Wann ech gelift</i>	お願いします
<i>Merci</i>	ありがとう
<i>Gär geschitt!</i>	どういたしまして
<i>Wéi geet et?</i>	元気ですか

関連機関

Ministère de la Culture

(ルクセンブルク文化省)
4, boulevard F.D. Roosevelt
L-2450 Luxembourg
Tel.: (+352) 247-86600
info@mc.public.lu
www.gouvernement.lu/ministeres-administrations

Université du Luxembourg

(ルクセンブルク大学)
162A, avenue de la Faiencerie
L-1511 Luxembourg
Tel.: (+352) 46 66 44-6000
www.uni.lu

Institut national des langues

(ルクセンブルク言語研究所)
21, boulevard de la Foire
L-1528 Luxembourg
Tel.: (+352) 26 44 30-1
info@insl.lu
www.insl.lu

参考ウェブサイト

www.cpll.lu

教育

ルクセンブルク憲法は、国には教育制度を設立・規制する権利があると定めています。したがって、学校の大多数は国立で、学費は無償です。有料の私立学校も少数ながら存在しますが、カリキュラムの内容と取得できる資格は同じです。国立および私立学校その他、有料の外国人学校もあり、そこではカリキュラムが異なるので、得られる資格は異なります。

教育制度

初等教育

2009年2月6日に制定され、9月に施行された法律は、9年間の「初等教育」を定めています。初等教育は4つの学習サイクルに分けられます。

- ・ 第1サイクルは幼稚園で行われ、任意で受けられる1年間の早期教育と、必修の2年間の就学前教育で構成されています。

早期教育は3歳児が対象で、子どもの社会スキルを伸ばすことを目的としています。国籍に関係なく、すべての子どもがルクセンブルク語をコミュニケーションの言語として学びます。

就学前教育は義務教育で、当該年の9月1日までに4歳の誕生日を迎えた子どもが対象です。



© Christof Weber/SIP

- ・ 第2、第3、第4のサイクルは小学校で行われ、各サイクルは2年間です。

小学校教育は、当該年の9月1日までに6歳に達した子どもすべてが対象です。

中等教育および中等技術教育

幼稚園と小学校での初等教育を終えると、中等教育あるいは中等技術教育を受けることになります。中等教育は7年間で、大学に進むための準備期間となります。中等技術教育は分野によって6～8年間にわたり、主に専門職につくための技術を身につけますが、高等教育課程で勉強を続ける道も開かれています。

高等教育および大学教育

専門技術高校では、主に「応用美術」「経営」「産業」「医療専門職」「サービス業」の5分野の高等教育を受けることができます。さまざまな専門科目から構成されていて、2年あるいは3年間で専門技術を身につけると、職業訓練修了証として、上級技術者免状(BTS – brevet de technicien supérieur)を取得することができます。

2003/2004年度より、ルクセンブルク大学で大学教育が行われています。教育・研究活動は、各学部および学際センターで行われており、複数専門分野にまたがるテーマを追求しています。

大学教育は3段階に分かれており、各段階で取得できる資格の種類が異なります。最初の段階では学士、第2段階では修士、第3段階ではPhDの資格が取得できます。

大学のミッションの1つは、教育と研究を確実に連携させることです。したがって、大学では基礎研究と応用研究、さらに技術研究を推進しています。研究は、諸機関・組織、企業、国内および国際的な研究機関と提携してプロジェクトを立ち上げ、進めています。

言語学習

初等教育の第1サイクルにおいては、教師は生徒に主にルクセンブルク語で話します。目的は、すべての子どもたち、特に学校で初めてルクセンブルク語に触れる外国人居住者の子どもたちの言語能力を育成することです。

言語教育は、学校教育全体を通じて重要な役割を担っています。第2サイクルの1年目にあたる6歳から、子どもたちはドイツ語の読み書きを勉強し始めます。ドイツ語は、初等教育期間において、フランス語以外のすべての科目での共通語です。フランス語は、第2サイクルの2年目から学び始めます。

中等教育と中等技術教育の最初の3年間においては、フランス語と数学を除くすべての科目をドイツ語で勉強します。中等教育の4年目からは、言語科目を除くすべての科目でフランス語が共通語になります。しかし、技術教育では、引き続きドイツ語が主に用いられます。英語は2年目から学びます。中等教育ではその他の言語も選択科目に加わります(ラテン語、スペイン語、イタリア語)。一部の国立中等学校はフランス語あるいは英語だけで学習するコースを設けています。

中等教育および中等技術教育の低学年においては、1週間に1時間ルクセンブルク語を学習します。統合クラスでは、ルクセンブルクに移住してきたばかりの子どもが特別に開発された手法でルクセンブルク語を学びます。

ルクセンブルクにある数少ないフランス人学校、英国人学校、インターナショナルスクールにおいては、主にフランス語と英語が用いられていますが、ドイツ語、さらにはルクセンブルク語の学習がカリキュラムに含まれていることもあります。

ルクセンブルク大学も、やはり多国語主義を採用しています。2003年8月12日付のルクセンブルク大学創設に関する法律では、「多言語での教育に特化する」ことが明記されています。大学の使用言語はフランス語、英語、ドイツ語です。多言語主義の採用により、学生はドイツ語、フランス語、英語圏の大学に留学しやすくなっています。

関連機関

Ministère de l'Éducation nationale, de l'Enfance et de la Jeunesse

(ルクセンブルク教育・青少年省)
29, rue Aldringen
L-1118 Luxembourg
Tel.: (+352) 247-85100
info@men.lu
www.gouvernement.lu/ministeres-administrations

Ministère de l'Enseignement supérieur et de la Recherche

(ルクセンブルク高等教育・研究省)
20, montée de la Pétrusse
L-2327 Luxembourg
Tel.: (+352) 247-86619
www.gouvernement.lu/ministeres-administrations

Université du Luxembourg

(ルクセンブルク大学)
162A, avenue de la Faiencerie
L-1511 Luxembourg
Tel.: (+352) 46 66 44-6000
www.uni.lu

参考ウェブサイト

www.education.lu

文化

ルクセンブルクの文化の特長は、提供されるものの質の高さと豊かさ、そして多文化と多言語性です。海外からの訪問者はその豊かさに目を見張り、さまざまな文化の渦に巻き込まれたように感じるかもしれません。しかしそれは、目まぐるしく進化を続けるルクセンブルクの文化においては、日常の一環にすぎないのです。

歴史に根ざした現代文化

ルクセンブルクは中世より、歴史的にも地理的にも、フランスとドイツという2つの大国の文化の影響を受けてきましたが、現在のルクセンブルクの文化には、過去と現在を結びつける独自の個性があります。

1994年にユネスコの世界遺産に登録されたルクセンブルク市は、1995年には初めて欧州文化首都にも選ばれ、国を挙げてその準備に取り組む過程で、ルクセンブルクの文化に世界の注目が集まりました。2007年には、ルクセンブルクと隣国の近郊地域の合同という画期的な形で臨み、再び欧州文化首都に選ばれました。欧州文化首都に2回指定された都市は、今日までルクセンブルクだけです。

1995年の欧州文化首都指定に向けて、あるいはそれをきっかけとして、多くの卓越した建築物が新たに建てられたり、修復されたりしました。その中には、クリスチャン・ド・ボルザンバルクによるフィルハーモニー音楽堂 (Philharmonie)、ルクセンブルク国立劇場 (Théâtre national du Luxembourg)、イオ・ミン・ペイが手掛けたジャン大公近代美術館 (Musée d'art moderne Grand-Duc Jean)、3つのドングリ博物館 (Musée Dräi Eechelen)、ノイミュンスター修道院文化会館 (Neimënster – Centre culturel de rencontre Abbaye de Neumünster)、ルクセンブルク市大劇場 (Grand Théâtre de la Ville de Luxembourg)、エッシュ＝ベルヴァルのロカール＝アンプリファイド・ミュージック・センター (Rockhal – Centre de musiques amplifiées)、デュドラランジュの国立視聴覚センター (Centre national de l'audiovisuel) などがあります。



3つのドングリ博物館と背後に控えるジャン大公近代美術館
© Christof Weber/SIP

多文化という文化性

ヨーロッパの中心に位置し、160カ国以上の国籍を持つ人々が暮らすルクセンブルクでは、多くの文化が交差しています。尊重と寛容、開放性がルクセンブルク文化の特徴です。多文化を擁する環境に、複数の言語が用いられるという独自性が加わり、多くの可能性が生まれるのです。

日常生活の中心にある文化

ルクセンブルクは小国ながら、最新の文化施設を数多く擁しており、非常に多くの才能あふれる芸術家を輩出しています。芸術の愛好家にとっても、また芸術の担い手である人々にとっても、文化は日常生活に欠かせない一部となっています。ポップカルチャーも浸透しています。特に、若く才能豊かなアーティストやクリエイターを中心として、政府は資金面も含めてカルチャーシーンを積極的に支援しています。国外における評価もいっそう高まりつつあります。ルクセンブルク出身の芸術家が海外の専門家に注目されるにつれ、海外の著名な文化団体との協力や連携も増えてきており、ルクセンブルクの文化の豊かさや多彩さの証明ともなっています。

(文化省・著)



フィルハーモニー音楽堂
© Jörg Hejkal

関連機関

Ministère de la Culture

(ルクセンブルク文化省)

4, boulevard F.D. Roosevelt

L-2450 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-86600

info@mc.public.lu

www.gouvernement.lu/ministeres-administrations

参考ウェブサイト

芸術、文化、美術館

www.culture.lu

www.statermuseum.lu

www.musee.lu

文学

www.bnl.lu

www.cnl.public.lu

劇場

www.theatre.lu

舞踊

www.danse.lu

音楽

www.philharmonie.lu

www.rockhal.lu

www.ugda.lu

建築、文化遺産

www.luca.lu

www.anlux.lu

www.ssmn.public.lu

映像、写真

www.cna.public.lu

www.filmfund.lu

ルクセンブルクおよび近郊地域

www.espaceculturelgr.eu

www.plurio.org

発行者

ルクセンブルク政府広報局
出版部門

33, bd Roosevelt

L-2450 Luxembourg

Tel.: (+352) 247-82181

Fax: (+352) 47 02 85

edition@sip.etat.lu

www.gouvernement.lu

www.luxembourg.lu

翻訳

Unicul International, Inc.

レイアウト

Repères Communication

ISBN 978-2-87999-260-0

2015年3月

本書におけるすべての統計データは出典の明記がない限りルクセンブルク国立統計局によるものです。



LE GOUVERNEMENT
DU GRAND-DUCHÉ DE LUXEMBOURG
Service information et presse

